

日本語学習者と日本語母語話者との予測文法の比較

著者	花城 可武
雑誌名	長崎外大論叢
号	19
ページ	1-16
発行年	2015-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000336/



*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 19 2015*

日本語学習者と日本語母語話者との予測文法の比較

花 城 可 武

Expectancy Grammar between Learners of Japanese and Native
Speakers of Japanese

HANASHIRO Yoshitake

長崎外大論叢

第19号
(別冊)

長崎外国語大学
2015年12月

日本語学習者と日本語母語話者との予測文法の比較

花城可武

Expectancy Grammar between Learners of Japanese and Native Speakers of Japanese

HANASHIRO Yoshitake

Abstract

This study defines, the term “expectancy grammar” proposed, by Oller (1979), as the ability to process the language information, and predict the appropriate language elements for a given situation. The Japanese conditionals, BA, TO, NARA, and TARA, were used for the data analysis to investigate expectancy grammar between learners of Japanese (LJ) and native speakers of Japanese (NSJ). The participants in this study were asked to complete sentences in response to two different types of questions. The following results were obtained: 1) NSJs showed consistency when answering some questions but not all. The results were in agreement with those obtained by NSJs. 2) the higher levels of language in LJs contained fewer grammatical errors than the lower level. No grammatical errors were observed at both levels in some questions. 3) word usage was inconsistent between different questions when answered by both NSJs and LJs. LJs’ word choice completely differed from that of NSJs, based on cultural background shown only in LJs’ group.

キーワード：予測文法 条件文 日本語母語話者／日本語学習者

1. はじめに

私たちが文の意味を理解する時には、寺村（1987）が、「われわれが文の意味を理解するには、語彙的意味についての知識と、文法的意味についての知識が土台になっている（寺村 1987：56）」と述べているように、母語話者であればある程度次に何が来るか語彙や文法の知識などを使って予測できると考えられている。また、大野他（1996）は「予測を起こす要因としては、語、語句、文、イントネーション等の音声的な要因、文脈等といった様々なものが考えられる（大野他 1996：74）」と述べている。そして、Oller（1983）は、言語情報を処理する能力だけでなく、次に続く言語情報を予想しながら処理していく能力を、「予測文法」と呼んでいる。また、Oller（1979）は予測文法をいわゆる文法的なレベルだけでなく、語用論のレベルでも想定した。通常文脈的制約に従って起こる予測と、言語的な文脈と非言語的な文脈の語用論的な相互関係によって起きる予測の二つがあると考えた。

しかし、「予測文法」という用語だけでは解決できない文化的背景や語彙などから来るものがあるので、文法という枠の中だけで捉えられるものではないと考えられる。例えば、市川（1993：2-3）は、文法知識以外にも予測をするために、「語彙、音声、音韻、暗記、視覚、社会言語的情報」などの知識が必要だと述べている。さらに、「『予測能力』とは一つ一つの字句に支配されることなく、

単独の、また複数の言語要素から、文全体を見通す能力(社会通念、常識、文化的知識と含めて)は、ある程度の日本語能力が備わって築かれる総合的な力であると同時に、日本語力養成の初期の段階から方向付けをなされるべき能力」だと述べて、教育上の重要性を挙げている(市川 1993: 17)。日本語学習の初期段階から文化的な背景も学んでいけば、築かれていく能力の一つだと思われる。

本研究では、言語情報を処理し、それに続く言語要素を予測する能力を予測文法と定義し、日本語母語話者と日本語学習者を対象に、特に日本語の条件文の予測とその要因を明らかにすることを目的として後続文の完成問題を行い、予測文法の違いを調査した。

2. 先行研究

今まで行われてきている予測文法に関する研究は、日本語母語話者・日本語学習者を対象に行なわれてきている(寺村 1987; 市川 1993; 酒井 1995; 大野他 1996; 菊池他 1997; 原 2009; 中山 2010)。

石黒(2008)では、「後続文の予測という用語は2種類の意味で使われている。一つは今読んで理解している文、この文を当該文と名づけると、この当該文中の後続要素の予測という意味であり、もう一つは当該文の後に続く別の文の予測という意味である。前者は文の中の成分を単位とし、後者は文を単位とし、1文を越える予想を想定している(石黒 2008: 34)」と述べている。

他の一文中での後続要素の予測を問題にしている研究は、以下のようなものがある。寺村(1987)は、日本語母語話者を対象に、聴き取りのプロセスの仕組みを考察することを目的に、調査文を文節ごとに少しずつ長くしていった後続文を予想させた。その結果として、正確にかつかなり先まで予測できることや、文の種類や表現内容の種類などを予測できることを指摘している(寺村 1987: 58)。

一方、日本語学習者を対象とした先行研究として、市川(1993)がある。これは、寺村(1987)と同じ調査を日本語学習者に行い、その結果、言語形式にばらつきが多く、語句や表現に限りがあるということが明らかになった。そのため「文全体を見通す文法的能力(社会通念、常識、文化的知識も含めて)は、ある程度の日本語力が備わって築かれる総合的な力であると同時に、日本語力養成の初期の段階から方向付けをなされるべき能力であろう(市川 1993: 17)」と提案している。

酒井(1995)は後続文完成問題を日本人に行い、日本語学習者と日本語母語話者に継続文作成をさせ、その結果を比較した。語彙的な要素や文化習慣的な言語の背景の要素があるにもかかわらず、日本人母語話者の解答は収束する一方で、日本語学習者の解答は間違いではないが不自然な表現が出てきたと報告している。そして、日本語学習者が産出する日本語にばらつきが出てくる原因を「①語彙力や文法力など、②日本語にふれた経験など、③母語や母国の文化の影響、④教え方の問題(酒井1995: 21)」の大きく4つにあると指摘している。

大野他(1996)では、助詞「が/の/に」の予測機能に注目し、「名詞に」と捉えるには特定の言語要素が必要になり、「名詞の」を主語としてとらえる予測は難しく、さらには予測には言語外情報が影響を与えると述べている。日本語学習者の産出する非文は多いが、日本語能力が上がるにつれて、予測する語・文型の種類が豊富になり、予測の仕方が日本語母語話者に近づくということが調査の結果からわかった。

菊池他(1997)は、文末のモダリティ表現の予測の仕方とその要因について日本語母語話者と日本語学習者との比較を行った。その結果、日本語母語話者は「～によると」がモダリティ表現の引き金

になること、上級レベルの学習者は母語話者と比べて予測できるモダリティ表現の種類に限りが見られたこと、学習者の日本語能力のレベルが進むにつれて、モダリティ表現の正用が増えたという結果を得ている。

原（2009）は、寺村（1987）と同じ実験方法と同様の手法を用いて、中級と初級の日本語学習を対象に後続文完成を行った。結果は、学習者の母語による影響、文化的背景などの言語外知識の影響、学習指導上の影響など、予測は学習者の文法知識だけに限られていないことが明らかになった。さらに原（2009：48）では、実際に使われている日本語に近い形で日本語が学べるような、予測能力を活性化させる学習方法の例を提案されている。

中山（2010）では、寺村（1987）と同様の調査文を使い、日本語母語話者と日本語学習者の予測能力を調査している。その結果、日本語母語話者は早い段階での述語のタイプとテンスの予測が可能で、日本語学習者は予測の仕方にばらつきがあること、文脈情報が予測に影響を与えていることが明らかになった。そして、日本語学習者の予測のばらつきが見られることから、日本語母語話者の予測の傾向を日本語教育の現場に応用することを提案している（中山 2010：12）。

日本語学習者を対象にした研究からは、日本語のレベルが上がれば母語話者の予測能力に近づくという傾向が見られ、正用が増えるなどの結果が報告されている。

そこで上記の研究結果を踏まえて、本研究では条件文を使って、①後続文の視点（文の主語が自分か否か）、②日本語学習者が産出した非文、③後続文の語（語が一致するか）の3つの観点から、それぞれの例を挙げながら、予測文法の体系の一端を明らかにすることを目的とした。

3. 調査方法

調査協力者として、日本語母語話者35名（以下、NS）と、オーストラリアの大学で日本語を学ぶ大学生（全員英語母語話者）（以下、日本語学習者：JL）33名を対象に、2001年3月に調査を行った。JLに関しては、始めにプレイスメントテスト¹を行い、テストの結果から平均点より上の得点を取ったグループをJLAとし、平均点より下の得点を取ったグループをJLBとし、2つのグループを設けた。

調査項目として、日本語の条件文（バ・ト・ナラ・タラ）を使い、バのみ動作性と状態性の2項目に増やした²。そして、質問文を2つのタイプを、[1]「テストが終われば、～。」と[2]「田中さんが来なくても、鈴木さんが来なければ、～。」のように句を追加した2つのタイプの質問文を作成した。そして、[1]と[2]のタイプをそれぞれ2組、計20問を用意した（バ動作性・バ状態性・ト・ナラ・タラ x 2タイプ x 2組 = 20問）。[2]のタイプを設けた理由は、句を挿入することによって、後続文の語が一致しやすいか否かをみるためである。今回の質問文・質問のタイプ・調査項目の一覧は資料1に記した。質問文の提出順序は、同じ条件文や[1]と[2]のタイプが続かないように考慮した。

時間は特に設けず、調査協力者が提出するまでとした。なお、データは日本語教育を専攻とする大学院生に、後続文の視点・JLの非文（本研究での非文の定義は、文法的に正しくないものとした）・後続文の語の分析を依頼した。

4. 結果と考察

4-1 後続文の視点

4-1-1 日本人母語話者と日本語学習者との比較

調査協力者が回答した後続文をどの視点から見ているか、つまり自分の視点からかそれ以外かを調べ、表1にまとめた。「同じ」とは前件と後件の主語が同じという意味で、「それ以外」とは前件と後件の主語が異なるという意味である。そして、質問番号、NS、2つのJLグループ（JLAとJLB）をそれぞれまとめたものである。

まず、後続文の視点に関して、NSの視点が全員一致した質問文は2、3、17であった。例えば、質問文2ではお金を持っている人が、何でも買える／何でもできるという解答、質問文3ではコーヒーを飲むのも、後続文の主語も「私」という解答を書いたことになる。それから、質問文17も同様に、3年間日本にいるのも、後続文の主語も「私以外」ということになる。以下に、多かった解答例を挙げる（#：質問番号、解答例は後件のみ原文のまま）。

- (1) #2-NS：ほしい物がすぐかえる／何でもできる／一生遊んでくらせるのに、等
- (2) #3-NS：目がさえる／ねむれません／胃がいたくなります、等
- (3) #17-NS：話せるようになるでしょう／上手になる／たぶんなれるでしょう、等

そのうち、JLの視点が全員一致したものは質問3であった。質問3は、前件が「私」で始まっていたので、わかりやすかったのだろう。以下にその解答例をあげる。

表1 後続文の視点（人）³

質問番号	NS (35)		JLA (19)		JLB (14)		JL (33)	
	同じ	それ以外	同じ	それ以外	同じ	それ以外	同じ	それ以外
1	23	12	7	10	3	6	10	16
2	35	0	18	1	10	4	28	5
3	35	0	19	0	13	0	32	0
4	28	7	14	3	6	1	20	4
5	32	3	15	1	10	3	25	4
6	15	20	10	9	6	7	16	16
7	18	17	6	13	5	7	11	20
8	24	11	3	2	2	2	5	4
9	8	27	3	16	4	8	7	24
10	17	18	9	10	5	7	14	17
11	4	31	3	9	2	8	5	17
12	26	9	13	1	8	2	21	3
13	1	34	2	14	1	2	3	16
14	7	28	4	9	4	6	8	15
15	30	5	5	14	1	8	6	22
16	34	1	9	7	4	1	13	8
17	0	35	0	17	0	10	0	27
18	2	33	1	18	0	10	1	28
19	15	20	10	3	8	1	18	4
20	23	12	16	2	9	1	25	3

- (4) #3-JL: ねられない／元気になります／気持ちが変わります、等

ここでは、質問文で使われている「コーヒー」という言葉から後続文が予想しやすかったのではないかと考えられる。

日本人母語話者が90%以上の一致率(32名以上)になった質問文13、16、18、5(一致率順)のうち、JLと一致率が異なる質問文は、13(61.9%)であった。その解答例の比較を下に記す。

- (5) #13-NS: 将来が楽です(なるでしょう)／将来(きっと)役に立つ
 (6) #13-JL: よかった／もっとたいへんになりました／できると思う／もっとたいへんでした

一方、NSでも視点の解答が分かれた質問文1(バ動・65.7%)、6(バ動・42.9%)、7(バ状・51.4%)、8(ト・68.6%)、10(タラ・48.6%)、19(ナラ・42.9%)、20(タラ・65.7%)があるので、JLも日本人母語話者のように視点に分かれてもいいのではないかと考えられる。つまり、JLもNSと同じような使い方をしているからである。例として以下のようなものがあった。

- (7) #7-NS: 電車で通うつもりです／歩いていきましょう／バスで行こう／歩いていきなさい、等
 (8) #7-JL: 電車で来てください／あるいて20分ぐらいかかる／私のをかしてもいいです、等

このうち質問文10のNSでは後件の視点を「同じ」としたものが17名、「それ以外」が18名あった。一方JLではそれぞれ14名と17名あった。

- (9) #10-NS「同じ」: 体をいやそう／こっそりテレビを見る／手を洗う、等
 (10) #10-JL「同じ」: 母のりょうりが食べたい／すぐごはんを食べました／シャワーを浴びました、等
 (11) #10-NS「それ以外」: うがいをしなさい／母がテレビを見ていた／だれもいなかった、等
 (12) #10-JL「それ以外」: ご連絡ください／友達が待っていた／電話がなりました、等

上の質問文のように、NSでも視点に分かれているので、JLの視点に分かれているのも当然のことと推測できる。

4-1-2 日本語学習者のレベルにおける比較

次に、後続文の視点は日本語のレベルによって違うものか調べた。ここでは、JLAとJLBとの比較のみを行う。JLが書いた後続文が非文となった場合は表1の数には入れていないので、JLAとJLBとの比較が難しいが、JLAとJLBとで後続文の視点に大きく差がある質問文を取り上げると、質問文の7・9・13・16に大きな差が見られた。表2は表1から該当する箇所を取り出したものである。

表2 後続文の視点 (人)

パターン	質問番号	項目	JLA (19)		JLB (14)	
			同じ	それ以外	同じ	それ以外
[1]	7	バ (状態性)	6	13	5	7
	9	ナラ	3	16	4	8
[2]	13	ト	2	14	1	2
	16	バ (動作性)	9	7	4	1

この表からわかることは、質問文7は条件文の項目で言うと「バ (状態性)」、質問文9は「ナラ」、質問文13は「ト」、質問文16は「バ (動作性)」にそれぞれ該当し、質問文2と7は [1] のタイプで、質問文13と16は [2] のタイプということがわかる。特に、JLB の質問文13・16には非文が多かったので、このような結果になった可能性が高い。

次節で述べるのでここでは詳しく述べないが、この表からわかることは、[2] のパターンの質問文になると JLB のグループの非文が多くなるので、JLA との比較が難しいということがわかる。

4-1-3 条件文別による比較

この項では、どの条件文の項目に視点の違いが出るのか、また [1] のタイプと [2] のタイプでどのタイプに違いが出るのかを調べた。表3は5つの条件文の項目と質問文のタイプによる視点の違いをまとめたものである。

最初に、条件文の項目別に見ていく。最初に NS の視点で一致しやすいものは、[1] の「ト」と [2] の「ト」・「ナラ」で、JL も [1] の「ト」と [2] の「ト」であった。視点に関して [1] と [2] の「ト」は JL にとっても、一致しやすいことがわかった。

また、[1] と [2] のタイプで見ても、条件文の項目別同様、[1] と [2] の「ト」は視点が一貫しやすい項目ということがわかった。

表3 条件文と質問文のタイプによる視点 (人)

タイプ	条件文	NS (70)		JLA (38)		JLB (24)		JL (66)	
		同じ	それ以外	同じ	それ以外	同じ	それ以外	同じ	それ以外
[1]	バ動	38	32	17	19	9	13	26	32
	バ状	53	17	24	14	15	11	39	25
	ト	59	11	22	2	15	2	37	4
	タラ	36	34	17	19	10	9	27	28
	ナラ	49	21	24	11	15	10	39	21
[2]	バ動	38	32	12	16	6	9	18	25
	バ状	26	44	13	18	8	12	21	30
	ト	3	67	3	32	1	12	4	44
	タラ	22	48	14	12	12	7	26	19
	ナラ	53	17	21	16	10	9	31	25

4-2 日本語学習者の非文

4-2-1 非文の産出

次に、JL が後続文でどれくらい非文を産出したかを、JL のグループのレベル別にまとめたものを表4に示した。

表4 非文を産出した日本語学習者(人)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
JLA (19)	2	0	0	2	3	0	0	14	0	0	7	5	3	6	0	3	2	0	6	1	54
JLB (14)	5	0	1	7	1	1	2	10	2	2	4	4	11	4	5	9	4	4	5	4	85
JL (33)	7	0	1	9	4	1	2	24	2	2	11	9	14	10	5	12	6	4	11	5	139

この表から、全体的に上位レベルのJLAの方が下位グループのJLBより非文の数が少ないことがわかる。そして、JLAでは非文の現れない質問文(2・3・6・7・9・10・15・18)のうち、JLBでも比較的的非文が少ないということもわかった。特に、質問文2では2つのグループとも非文が現れなかった。

次に、JLAの方がJLBよりも非文の産出が少なかった質問文(1・3・4・6・7・9・10・13・15・16・17・18・20)は13問あり、その反対のJLBの非文産出が少なかった質問文(5・8・11・12・14・19)は6問あった。

一方、2つのレベルに共通して非文が多かったのは、質問文8「明日天気がいいと、～」の[1]のタイプの「ト」の質問文だった。以下に、JLの非文の例を挙げる。

- (13) #8-JLA: ピクニックをしようか/さんぽにいきましょう/こうえんに行こう、等
 (14) #8-JLB: さんぽ(ピクニック)に行きましょう/みんなとピクニックに行くつもりだ/ピクニックをするのはどう、等

続いてはNSとJLの後続文の違いがよく出ている質問文10を見る。日本人母語話者が後続文に過去形を使った例は12例あったが、そのうち発見の用法の「タラ」は10例、継起関係を表す「タラ」は2例であったのに対し、JLが使用した発見の例は11例、継起関係を表す「タラ」は6例あった。この質問文3では非文が出てこなかったため、JLは発見と継起の用法を正しく習得していると考えられる。

- (15) #10-NS: 母がテレビを見ていた/だれもいなかった/電気がついていなかった、等
 (16) #10-JL: 友達が待っていた/だれもいなかった/電話がなりました、等

上記の解答例のように、2つのグループに共通して見られたものを見ると、「ト」には後続文に意志・希望・命令・依頼などの表現が来ることはないのだが、解答例に見られるようにかなりのJLがこれらの表現を使っていた。これに対して、NSの解答例は3つのパターンがあり、一つ目は普通の後続文の形で終わるパターン(28名)、二つ目は「～のに」「～けど」などの逆接の接続助詞の形で終わるパターン(5名)、三つ目は数は少なかったが、引用を表す助詞の「と」で終わるパターン(2名)があった。

- (17) #8-NS: 1) 桜が散らずにすむ/運動会がある/Xができる(ある)、等
 2) あそびに行けるんだけど/いいのに/~ができるのに/外で遊べるのに
 3) 天気予報が言っていた/ニュースで言っていた、等

同じ [1] のタイプの「ト」の質問文でも質問文3は全体で1つしか非文は出なかった。その理由として考えられるのは、4-1-1でも述べたが、質問文に「コーヒー」「飲む」という言葉が使われていて、「ねられない、元気になる」などの意味の後続文を予測しやすかったということが考えられる。

次に非文の産出が多かった質問文13 ([2] のタイプの「ト」) で14名が非文だった。そのうち11名がJLBのグループであった。下にその例を記す。

(18) #13-JLB: できると思う／今よりとても大変だ／もっと大変でした、等

この質問文13の非文は、句が一つ入ったために与えられた文の意味がはっきりわからず、後続文が非文になってしまった可能性が考えられる。

質問文13ではJLの非文の多くは、上の例に見られるように後続文に過去形を使った文が見られた。一方、同じ [2] のタイプの「ト」を使った質問文18には非文はあまり見られなかった。これは、「夏」「暑い」「秋」という言葉から、「涼しい、涼しくなる」など天気や気候を予測させる言葉が出やすかったという可能性が高い。

三番目に非文の産出が多かった質問文16 ([2] のタイプの「ト」) では、12名が非文だったが、そのうち9名がJLBのグループであった。下に例を挙げる。

(19) #16-JLB: なりません／しんぱいしないで下さい／こみすぎる、等

これも質問文13同様、与えられた質問文の意味がわからなかったために後続文が非文になったと考えられる。

4-2-2 条件文別とタイプ別

ここでは、JLがどの条件文の項目で非文を産出したか、JLのグループ別と [1] と [2] の条件文のタイプ別にまとめたものを出した解答をレベル別と条件文の項目別にまとめたもの (図1) を説明する。

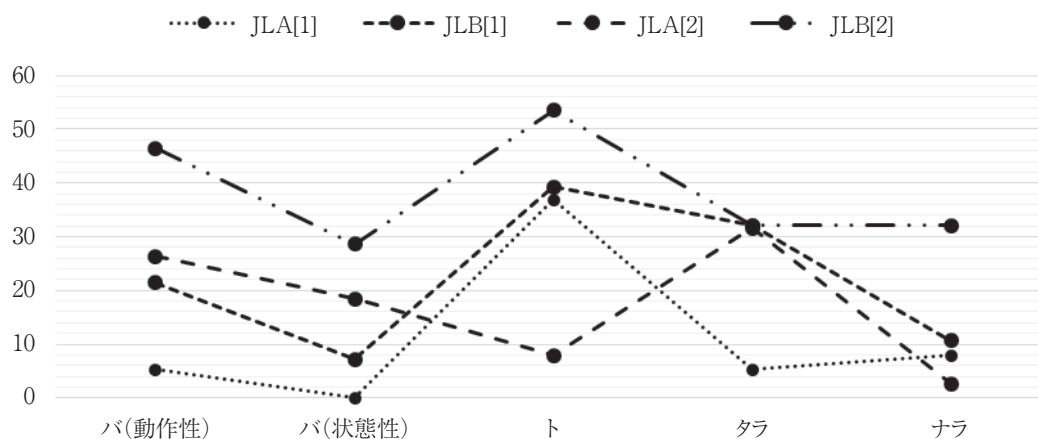


図1 条件文の項目別非文出現率 (%)

図1を見ると、「バ(状態性)」以外 JLA の方が JLB よりも非文の出現率は低く、特に JLA の [1] のパターンでは「バ(状態性)」に関しては、JLA の非文出現率は0%だった。また、「ト」は JLA の [2] のみ非文出現率が低く、JLB の [2] との差は大きかった (JLA : 7.9%、JLB : 53.6%)。また、「タラ」は JLA のみ出現率が低く、その他は30パーセント付近に固まっている。「ナラ」は JLB の [2] のタイプは非文出現率が高かった。質問文中に句を入れた質問文と入れていない質問文とでは、句を入れた質問文の方が非文の産出率が低いと予想していたが、条件文の項目によっては予想に反した結果になった。

4-2-3 非文と視点の関わり

JL が条件文を使った後続完成文において、後続文に非文が多いことと視点は関わりがあるかということを見ていく。

表5は表1でNSの視点の一致率が高かったものから順(上位6位と下位4位)に並べたものに、JLの非文の出現率を併記したものである。

NSの視点の一致率の上位グループとJLAグループの関係を見ると、質問文2・3のようにNSの視点が一貫したものは比較的非文の出現率が低い。しかし、同じように一致していても、質問文17ではそのような傾向は見られなかった。一方、下位グループを見ると、質問文19のみ非文があったが、残りはNSの視点に分かれていたにもかかわらず、非文は少なかった。これに対し、NSの視点の一致率の上位グループとJLBグループの関係を見ると、JLAのような傾向は見られず、質問文13に関しては、非文の出現率が高かった。これは上でも取り上げたとおり、NSにとっては[2]のパターンは句を入れた質問文には語が一致する可能性が高いと予想できるが、JLにとっては句が入ることによって語が一致するのではなく、反対に意味が限定されるために後続文の完成が難しくなると考えられる。

表5 NSの視点の一致率から見た日本語学習者の非文出現率(%)

	質問番号	NS (35名)	JLA (19名)	JLB (14名)	JL (33名)
上位	2	100	0.0	0.0	0.0
	3	100	0.0	7.1	3.0
	17	100	10.5	21.4	15.2
	13	97.1	15.8	64.3	36.4
	16	97.1	15.8	50.0	30.3
	18	94.3	0.0	21.4	9.1
下位	7	48.6	0.0	7.1	3.0
	10	48.6	0.0	14.3	6.1
	19	42.9	26.3	21.4	24.2
	6	42.9	0.0	7.1	3.0

次は、JLの非文出現率の方に焦点を当てて、それらとNSの視点との関係をまとめたものが表6である。

JLで非文が出なかった上位6番目までの質問文2・3・6・7・9・10を見るとすべて[1]のパターンで、NSと比べると質問文2は視点が全員一致しているが、非文出現率が低いものはNSの視点の一致とはあまり関係がなさそうである。また、下位6位を見ると、一番非文の出現率が高かつ

表6 日本語学習者の非文出現率から見たNSの視点の一致率(%)

	質問番号	NS (35名)	JLA (19名)	JLB (14名)	JL (33名)
上位	2	100	0.0	0.0	0.0
	3	100	0.0	7.1	3.0
	6	42.9	0.0	7.1	3.0
	7	48.6	0.0	7.1	3.0
	9	77.1	0.0	7.1	3.0
	10	48.6	0.0	14.3	6.1
下位	14	80.0	31.6	21.4	27.3
	12	74.3	26.3	28.6	27.3
	11	88.6	36.8	14.3	27.3
	16	97.1	15.8	50.0	30.3
	13	97.1	15.8	64.3	36.4
	8	68.6	73.7	71.4	72.7

た質問文8(72.7%)は、NSの視点の一致率も低い、非文出現率の高い質問文14・11・16・13はNSでは視点が80%一致しているものが多い。

非文と視点の関係、非文が出るか出ないかの関係は、質問文の内容や語彙から連想されるものは比較的后続文を予測できると思うが、質問文の内容や語彙、各条件文の小さな規則まで考慮に入れないといけないものは、比較的非文が出やすいのではないだろうか。例えば、質問文13と質問文8(二つとも「ト」)の文法規則を考えると、質問文のパターンによっては「ト」の文法規則は難しいと思われる。

4-3 語の一致

三番目に、NSとJLとで語の一致があるか、[1]と[2]の質問文のタイプで語の一致が違うのか、そして、一致する語と一致しない語を2つのJLのレベル別の比較から見ていきたい。

4-3-1 日本語母語話者と日本語学習者による比較

ここでは、NSの後続文の語が一致するものを取り上げる。一致するものとして目立ったのが質問文17で、「話せる」という語を含む回答が多かった(80%:28名)。一方で、JLは「話す」という解答は36%(12名)の割合で、NSほど一致はなかった。その比較として、例20を挙げる。

- (20) #17-NS: 話せるようになる(だろう) / きっと話せるようになる / 少しは話せるようになる、等
- (21) #17-JL: なんとかなるだろう / 聞き取れるはずだ / ぜんぶわかるはずだ / 上手になる(だろう)などの「上手に」(10:うち1が「話す」と一緒に使用)、等

質問文の最初に「話せなくても」という言葉があったので、多くのNSは「話せる」を予測したようだったが、JLは33名のうち10名が「話せる」ではなく、「上手に～」を書いた。その他にNSの後続文の語が一致するものの例として、質問文13があった。

- (22) #13-NS: 将来楽になるでしょう (15名) /あとで役に立つ (14名) /あとで・のちのち・のちのちのため・社会に出てから助かります、等

この質問では、卒業後のこと、たとえば「将来/あとで/のちのち」と質問文にあった「今」とコントラストを表す意味の語を含む解答が約83%もあり、同じ意味の語を予測していることがわかった。一方、JLの解答は、以下のように「いい仕事」が9名、「すごい仕事」「やりたい仕事」が各1名だったが、NSのように「しょうらい (2名)」・「みらい (1名)」を使った解答は少なかった。

- (23) #13-JL: いい仕事ができます (見わかります・さがせます)、等

4-3-2 質問文のタイプ別による比較

この項では、質問文のタイプで後続文の語の一致が見られるかを調べた。まず、[1]のタイプの質問文で、NSで語の一致が多くみられたのは、質問文2である。

- (24) #2-NS: ~が買えるのに/買える/何でも・いろいろ・好きなことができるのに/できる

語の一致という点で見ると、「買える」「できる」で終わったものはそれぞれ11名と10名で、その他に「遊べる」「(生活が)送れる」「くらせる」「行ける」等の動詞があったが、動詞はすべて可能形で終わり、全体で30名にのぼった。そして、文末の一致という点で見ると、「動詞(可能形)+のに」で終わったものは28名あった。これに対して、JLの解答には、「買う」と書いた17名のうち「買える/買うことができる」の可能形の例は8名に過ぎなかった。また、「~のに」を使った文末はなかった。

次に、[1]のタイプで一致した例として質問文3があったので、NSとJLが書いた例を、以下に挙げる。

- (25) #3-NS: 目が覚める(9)/ねむれない・ねむくならない等の「ねむい(否定形)」(7)/元気なる(3)

- (26) #3-JL: ねむれない・ねむくならない等の「ねむい(否定形)」(10)/元気なる(5)/目が覚める(1)

4-1-1で説明したように、質問文の「コーヒー」という語からJLの多くは「眠れなくなる・寝られなくなる・ねられない」などの動詞を書いたが、「目が覚める」というコロケーションを使用したJLは1名のみであった。

次は、[2]のタイプの質問文で、NSとJLの語の関連性を見る。語の一致が多くみられたのは、質問文18である。

- (27) #18-NS: 急に涼しくなった(19)/じょじょに寒くなってきます(11)

- (28) #18-JL: だんだん涼しくなってきました(18)/すぐさむくなって来た(9)/暑い日ありません

(4)

ここでは、「夏」「暑い」「秋」からの予測で「涼しい」「寒い」という語を使ったものと思われる。続いて、[2]のタイプの質問文で、NSとJLの語の関連性を見る。語の関連性で違いが見られたのは、質問文16である。

(29) #18-NS: 意味がない(22)/始まらない(3)/行きません(2)

(30) #18-JL: 会議ができない・始まらない (それぞれ4)

NSの後続文は「意味がない」が22名あったが、JLの後続文で複数あったものは「会議ができない・会議が始まらない」などが各4名あったのみであった。質問文16からはJLの語の関連性は見られなかった。

[2]のタイプの質問文で、NSとJLの語の関連性というより、後続文を完成させる時の発想が非常に異なる例をここで示す。それは質問文15である。

(31) #15-NS-プラス : いい点をとりました/いい成績をとれるでしょう(7)

マイナス: 病気になった/体を壊しました/目がはれた(28)

(32) #15-JL-プラス : いい点がとれるでしょう/合格できると思うよ/100点まん点とれるだろう(26)

マイナス: 疲れます/朝、早く起きられなくなりました(6)

NSは「いい点をとりました」「いい成績をとれるでしょう」などプラスのイメージの後続文を書いた例は7名で、「病気になった」「体を壊しました」「目がはれた」等マイナスのイメージを意味する後続文が28例あった。それに対してJLは「いい点がとれるでしょう」「合格できると思うよ」「100点まん点とれるだろう」などのプラスのイメージの後続文を記入した例が26例で、「疲れます」「朝、早く起きられなくなりました」等マイナスのイメージを意味する後続文が6例あった。これは、日本語と英語の言語的な違いよりも、日本語と英語の文化的な発想の違いが起因した可能性がある。

5. まとめと今後の課題

本研究では、NSとJLを対象に条件文を使って後続文の完成問題を行い、①後続文の視点、②JLの非文、③語の一致の3つの観点から、予測文法の体系の一端を明らかにすることを目的として、調査を行った。

結果をまとめると、①視点に関しては、NSは[1]のタイプの質問文(句が挿入されていない質問文)では、質問文で使われている語で後続文が比較的容易に予測できるものもあれば、そうではないものもあった。[2]のタイプの質問文(句が挿入された質問文)ではNSのように、一致する傾向があるものもあったが、JLは[2]のタイプでも一致しないこともあった。特に、NSとJLの視点が同じになった質問文2に関して言うと、条件文のルールが限られ、かつ質問文には「私」と前件文の主語が明記してあったので、一致しやすかったのではないかと考えられる。質問文によっては、

視点がNSと逆になることもあった。

②非文に関しては、JLの下位グループJLBには、非文が多く見られた。このグループの非文に関しては、文法の規則が十分に理解されていないために、例えば、質問文「ト」の質問文に意志・希望・命令・依頼などの表現を使い、非文となった可能性が考えられる。しかし、上位と下位グループとも非文の現れなかった質問文もあれば、質問文で使われている条件文の項目や語彙によっては非文が表れた質問文もあった。

③語の一致に関しては、NSには句が入ることによって、次に来る語の予想が容易になる質問文でも、学習者にとっては語レベルだけではなく、文化的な背景も予想しなければならない点で予測が困難だったと予想される。NSにとっては[2]のパターンは句を入れた質問文には語が一致する可能性が高いと予想できるが、JLにとっては反対に後続文の完成が難しくなると考えられる。[1]のタイプでも、句を入れて語の一致が起きるだろうと思われた[2]のタイプでも、NSの使用した語に一致する傾向が見られた質問文もあれば、そうではなかった質問文もあった。中でも質問文15では比較的非文が少ない解答でも後続文に発想の違いが見られた。これは、NSの語が一致するのは文法だけでなく、語彙的な要素や文化的な要素などいろいろな要素が複雑に絡み合っていることを説明している。

これからの課題と教育への応用として、NSの語の一致という点では、調査方法の違いもあるが、寺村(1987)の結果と比べると考慮すべき点がある。それは、寺村(1987)の調査には先送り⁴があるために、使用した語の一致がかなり進んだのではないかと思われる。NSでも後続文の語が一致したり一致しなかったりした質問文があったので、調査で使用すべきでないとも考えることもできる。しかし、母語話者でも視点が異なる質問文でNSも同じように異なっているものは健全な習得ということができるのではないだろうか。

NSとJLの予測文法を、特に英語以外の母語の学習者、例えばアジア圏の学習者を対象に調査することによって、質問文15のような質問から学習者の文化的な背景がより明らかになるだろう。

注

- 1 日本語能力試験の2・3級の文法問題を参考に作成した。
- 2 調査協力者は、全員条件文を大学の授業で既に学習した学生である。条件文を選んだ理由は、モダリティーやテンスの制限等の文末の規則が正しく学ばれているかが判断できると思ったからである。そして、バのみ動作性と状態性を設けた理由は、意味と形が正しく理解されているかを見るためである。
- 3 非文を書いたJL(JLAとJLB)の解答数は、この表には入れていない。
- 4 市川(1993:4)では「先送り」を「前段階で予測した述語の言語形式をそのまま受け継ぐこと」と定義し、寺村(1987:66)の「先送り(ペンディング)」と同じとしている。

謝辞

本稿は、花城(2009)を基に大幅に加筆修正したものです。この調査に協力していただいた学生のみなさまに、深くお礼を申し上げます。

参考文献

- 石黒圭(2008)『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房
- 市川保子(1993)「外国人日本語学習者の予測の能力と文法的知識」『筑波大学留学生センター日本語

- 教育論集』8号 1-18頁 筑波大学留学生センター
- 市川保子 (2014) 「外国人日本語学習者の文法的予測力をどう育てるか－初級段階の学習者に向けて－」『日本語教育紀要』第10号 1-14頁 国際交流基金バンコク日本文化センター
- 大野早苗・堀和佳子・八若寿美子・池上摩希子・内田安伊子・郭末任・許夏珮・長友和彦(1996) 「予測文法研究－後続文完成課題から見た日本語母語話者と日本語学習者の予測文法について－」『日本語教育』91号 73-83頁 日本語教育学会
- 菊池民子・猪狩美保・嶽肩志江(1997) 「日本語モダリティ表現の予測能力とその習得に関する研究」『第二言語としての日本語の習得研究』1号 71-82頁 第二言語習得研究会
- 江田すみれ (1994) 「複合辞による条件文」『日本語教育』83号 85-95頁 日本語教育学会
- 酒井たか子 (1995) 「文の適切性判断のための一試案－後続文完成問題における日本人との比較－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10号 19-28頁 筑波大学留学生センター
- 寺村秀夫 (1987) 「聞き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』第6巻第3号 56-68頁 明治書院
- 中山英治 (2010) 「タイ人日本語学習者の予測能力と文脈情報：短作文調査結果の分析」『早稲田日本語教育学』第8号 1-13頁 早稲田大学日本語教育研究センター
- 花城可武 (2009) 「後続文完成問題における日本語母語話者と日本語学習者の予測文法の比較」『2009年度日本語教育学会春季大会予稿集』200-205頁
- 原やす江(2009) 「日本語学習者の予測能力と文法知識—学習レベルに現れた特徴と日本語習得過程」『城西国際大学紀要』第17巻第2号 31-51頁 城西国際大学 (国際人文学部)
- Oller, J. W. (1979). Language skill as a pragmatic expectancy grammar. In J. Oller, (ed.), *Issues in Language Test at School: A Pragmatic Approach*. 16-35. London: Longman.
- Oller, J. W. (1983). Evidence for a general language proficiency factor: An expectancy grammar. In J. Oller (ed.), *Issues in Language Testing Research*, 3-10. New York: Newbury House.

資料1 質問の番号・質問のタイプ・調査項目・質問文の一覧

質問	タイプ	調査項目	質問文
1	[1]	バ (動作性)	大学の授業が始まれば、
2	[1]	バ (状態性)	たくさんお金があれば、
3	[1]	ト	私はコーヒーを飲むと、
4	[1]	ナラ	もし手伝ってくれるなら、
5	[1]	タラ	大学を卒業したら、
6	[1]	バ (動作性)	テストが終われば、
7	[1]	バ (状態性)	車がなければ、
8	[1]	ト	明日天気がいいと、
9	[1]	ナラ	外が寒いなら、
10	[1]	タラ	家へ帰ったら、
11	[2]	バ (動作性)	あの人はいつもやさしい人ですが、そんなことを言えば、
12	[2]	バ (状態性)	とても高い本ですが、そんなにおもしろければ、
13	[2]	ト	今たいへんでも、学生の時にたくさん勉強しておくと、
14	[2]	ナラ	一日中寝てばかりいて、何もしないなら、
15	[2]	タラ	期末テストのために、毎日夜遅くまで勉強したら、
16	[2]	バ (動作性)	田中さんが来ても、鈴木さんが来なければ、
17	[2]	バ (状態性)	日本語が話せなくても、3年間日本にいれば、
18	[2]	ト	今年の夏は暑い日が多かったですが、秋になると、
19	[2]	ナラ	何回も調べましたが、私が間違っているのなら、
20	[2]	タラ	どんなに忙しくても、午後5時になったら、